

【地域教育実践報告】

2022年における城西大学経営学部石井ゼミナールの活動

石塚航貴*・加藤太一*・門伸聖*・神田莉久*・杉山侑矢*・砂野歩*・
諏訪真大*・寺内なつみ*・藤村和洋*・堀越溪太*・石井龍太**

キーワード：ローカルヒーロー、アクティブラーニング

1. はじめに

城西大学経営学部内にローカルヒーローによる地域貢献活動を行うゼミを立ち上げたのが2015年、今年度で8年目が終わろうとしている。毎年新しい進級生と新しいヒーローの物語を作り上げて来たことで、石井ゼミ発のローカルヒーローは既に9シリーズを数え、記憶の限り100を超えるキャラクターを世に送り出すことが出来た。

本稿は、石井ゼミ第7期生（2021年石井ゼミ進学生）による、2022年度の活動の振り返りである。直近の先輩となる5期生、6期生はコロナ禍が始まった頃の活動となり、苦勞と挑戦の多い世代だった。第5期生は祭事自粛の中でステージ活動の機会を失ったが、手作りマスク配りや衛生啓発カードの配布といった社会貢献活動、ステージのオンライン配信や美術展等を展開し活躍した。6期生はコロナ禍と社会の分断をテーマにし、未曾有の事態を前に混乱した世界を描くヒーロー『リジェネイダーJ』を作り出し、社会性の高さから注目されテレビ埼玉で取り上げられもした。

7期生もまたコロナ禍の中で2021年4月から活動を始めたものの、催事が少しずつ再開される等社会情勢が少しずつ変化していく時期でもあった。そうした中で、作品のテーマは「日常を取り戻す」に決まった。また「全員ヒーロー」という構成も取り入れた。地震、津波、放射能汚染、温暖化、伝染病…人類を立て続けに襲った大災害によって平凡な生活を奪われ、管理社会に組み込まれた若者が、かつての日常を取り戻すために反旗を翻す。一方で人類の存続と安定のため、管理社会を守る者達もまたヒーローとして現れる。7期生のヒーロー『レベルJ』はこうした世界観を持って、変わり行く2年間を駆け抜けた。世界観に加えアクションにもかなり力が入り、石井ゼミ8年の歴史の中でトップクラスのスピードとキレのあるステージを繰り広げた。その模様はYoutubeやHP (<https://josaiishiiseminar.wixsite.com/rebelj>) で確認してもらうこととして、本稿では学生達が活動の中で何を考えどう成長していったのかを彼らの言葉で描き出せればと思う。なお執筆担当は文末に（ ）書きで記した。（石井龍太）

* 城西大学経営学部石井ゼミ第7期生（2021年石井ゼミ進学生）※あいうえお順

** 城西大学経営学部准教授

2. 活動内容

2.1 第2回毛呂山町ビジネスコンテスト（6月25日 埼玉県坂戸市 城西大学坂戸キャンパス）

2022年6月25日、城西大学、清光会館清光ホールにて、第2回毛呂山町ビジネスコンテストが開催された（一次審査）。昨年に引き続き二回目のビジネスコンテストとなった。主催は毛呂山町のまちづくり会社「もろやま創成舎」である。コンテストの目的は「毛呂山町を元気にする事業の発掘」である。この毛呂山町をよりよい町にするための案を、いくつかの採点項目をふまえてプレゼンテーション形式で様々な企業から集めた。企業の発表が終わるとコンテストにご来場の審査員の方々に採点してもらった。コロナ禍ということもあり採点方法はQRコードを用いたフォームからの集計を活用した。

我々石井ゼミナールは「ローカルヒーロー」の研究とヒーローを用いた地域貢献活動を目的としているゼミである。今回もビジネスコンテストへの協力依頼を受けて、コンテストの会場運営を行った。会場設営、3、4年生の合同ヒーローショー、受付担当、司会、機材操作などそれぞれに役割を決め、度重なるリハーサルの下で行った。ヒーローショーでは、冒頭にヒーローたちが悪の怪人軍団にやられてコンテスト会場を乗っ取られ（図2.1-2）、怪人が司会をするといった一風変わった構成の話で進めた。最後に、ヒーローたちが必殺技で怪人軍団を倒しコンテスト会場を取り戻した（図2.1-3）。コンテスト終了後はヒーローたちと来場者全員での記念撮影が行われた。

今回のビジネスコンテストでうまくいった点は、本番を見据え繰り返し行ったリハーサルで発見した、機材操作、ショーの殺陣などのミスが多いところを都度修正したことによってミスを最小限に抑えられたところだといえる。リハーサルは2、3、4年生合同で行い、4年生が皆を率いて何度も繰り返し練習を重ねた。練習では学年関係なくどうすればよいのか、どう動けば面白く見せられるのかを意見交換して質の向上を図った。今回のビジネスコンテストのショーでは我々石井ゼミだけではなく、もろやま創成舎からもアクションに参加していただき、最後に怪人を倒す際のヒーローたちのコンビネーションアタックの先導をしていただいた（図2.1-3）。これはビジネスコンテストに来場した方々に強く印象付けられた出来事になったといえる。



図2.1 第2回ビジネスコンテスト
1. ポスター
2. 会場を支配する怪人たち
3. コンビネーションアタック

苦勞した点は、大人数でのヒーローショーで舞台上でのそれぞれのポジショニングに手間取ることが多く見受けられた。また、使い慣れない機材操作があったうえ、リハーサルではしばしば機材トラブルに見舞われたため万が一のための代案を考えるなどと苦勞したところである。

最後に、ビジネスコンテストという大舞台でのヒーローショーは、ゼミ生のチームとしての団結力、統率力を成長させ、緊張感のあるショーを経験したことによって一体感を得ることができた。地域を変えるべく考えられた熱量のこもったプレゼンテーションは企業の情熱を感じさせ社会人としての姿勢を学ぶ機会となる貴重な体験になった。(藤村)



1



2

図 2.2 坂戸七夕まつり
1. 殺陣の様子
2. ステージ後の集合撮影

2.2 坂戸七夕まつり (7月17日 坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場)

坂戸駅前のサンロード商店街で行われた、「坂戸七夕まつり」に参加させていただいた時の活動についてまとめる。内容は私たちが企画実行する『レベルJ』の第6話である。

サンロード商店街のイベントには坂戸イルミネーション点灯式など毎年参加させていただいており、地域活動として根付いている活動であるため、7月のとても暑い中であつたがたくさんの人に集まっていただきステージショーを披露することができた。ステージショーの前にグリーティングを行い告知し、ショーの後にも撮影会を行い大盛り上がるのイベントに出来たといえるだろう。

このイベントに参加して良かった点は、お祭りということもあり普段の単独でのイベントよりも幅広い人に見てもらうことができたことである。ショーの内容としては殺陣(図2.2-1)もしっかりとできていて、演技も良くできたと自負している。

また、全体での撮影会(図2.2-2)の後も声を掛けていただいたり、一緒に記念撮影をしたりと来ていただいた方々にも満足していただけるイベントにできたと考えられる。反省点は、ショーの撮影を後日、Youtubeに投稿するためのカメラの画角をしっかりと把握できていなかったため、後日確認した際、見切れていたり映っていなかったりしてしまった点があつた。

最後にこの活動を通じて、私は地域の人々と触れ合いイベント等を通じ喜んで貰える充実感や達成感、また人前に出て活動したことにより、自分自身の成長を感じることで自信につながるなど学生として大きく成長することができた。(砂野)

2.3 こども大学にしているま (7月30日 埼玉県坂戸市 城西大学坂戸キャンパス)

城西大学で開催された子ども大学にて、私は1日先生となり小学校4~6年生と一緒に地域の悪役を作ることになった(ヒーローは昨年作製した)。まず初めにキャラクターを3体作るということで3つのグループに分かれてみんなで話し合い、私のグループではダークヒーローを作り始めた。私は先生をした経験がなかったのでまとめられるのか、とても緊張していたが、子供達がたくさん発

言をしてくれたのでなんとか形にできたのである。

大変だなと思ったことは、まず子供達がいろいろな案を出してくれたものの、ご当地キャラクターとして地域の有名なものなどをヒーローに載せるということがとても大変で、どうしても子供たちはアニメや仮面ライダー、戦隊モノのようなカッコいいキャラクターにしようとしていたので、地域の特産物などといったものからは遠ざかってしまった。それを軌道修正し案を出してもらうのはとても難しかったのである（図 2.3-4）。

しかし、私がしっかりと子供達に寄り添い、地域の特産物でダークヒーローを作りたいから特産物ってなんかないかな？と聞いた時に子供達は納得してこれある！これもいいんじゃない！など色々案を出してくれた。私自身子供の頃からあまり強制されるのが好きじゃなくそれは今の子供達も同じだろうなと思っていたので回りくどい言い方をされるよりは直球で勝負して正面からぶつかってやろうと思っていたのもあり、回りくどい言い方をせずしっかりと話したらわかってくれたのでよかったなと思っている。

また、ダークヒーローの絵をみんなに描いてもらうとなった時に絵が下手で書きたくないという子供がかなり多かったものの、自分自身絵が下手なのでとりあえず褒めちぎってやろうと思いついた絵を描いてもめっちゃ上手いじゃん！などと褒めたところ感触がよくみんな喜んで描いてくれたのでとても助かったのである。その描いた絵から1カ所ずついいなと思ったものを引っ張り出して1人1人に描いてもらい最後に色を塗ってもらい、ようやく形にできた時の達成感はすごくあり、とても嬉しかったし、感動した。

各チームでできたヒーローはアダサ、ピンクイーン、アロキバ、の3つの悪役である。（図 2.3-2、3、4）。先生も悪くないし強いて言えば教員になるのも悪くないと思う1日であった。もっと早く石井先生のゼミでこういったイベントをしてればまた何か自分の中で変わっていたのかなと思う。普段やっているヒーローショーよりも正直なところ楽しかった。（杉山）

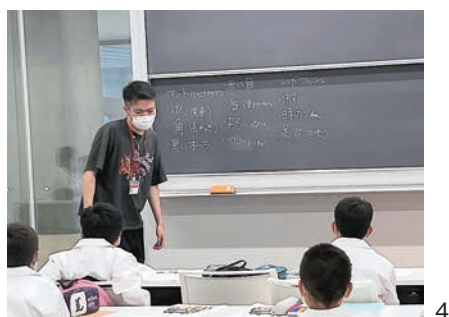


図 2.3 こども大学にしているま
1. アダサ 2. ピンクイーン
3. アロキバ 4. 授業の様子

2.4 学生イベント交流委員会事業「コロナ禍の学生生活 振り返り！ピンチをチャンスに！座談会 2022」（8月24日 東京家政大学）

城西大学はTJUP加盟校である。TJUPとは、埼玉東上地域大学教育プラットフォームの略称で、埼玉県の東武東上線沿線および西武線沿線の大学・短期大学、自治体、企業が加盟しているプラットフォームのことである。生活しやすい地域づくりや、地域産業の活性化を促がしている。

その活動のひとつとして、2022年8月24日に東京家政大学狭山校舎にて学生座談会が行われた。「ピンチをチャンスに」と題されたこの座談会は、コロナ禍の学生生活を振り返り、生じた課題と解決策を各校の生徒が発表し、意見交換を行うというものだった。コロナ禍により失われた学生の交流の場を設け、社会性、コミュニケーション能力の向上を目的としている。

運営の東京家政大学を始め、TJUP加盟校の中から東邦音楽大学、武蔵丘短期大学、山村国際短期大学、日本医療科学大学、女子栄養大学、跡見学園女子大学、十文字学園女子大学、文京学院大学、東京電機大学、立正大学、城西大学、駿河台大学の計13校が発表に挑んだ。

座談会は司会が進行しつつ、書記がホワイトボードに内容を写すといった形式で行われ、石井龍太ゼミナールはコロナ禍におけるヒーロー活動を題材に発表を行った。

他校の学生もそれぞれの立場ならではの課題を示しており、いち学生の身として見識を深められたと感じた。中でも東邦音楽大学や山村国際短期大学は我々と同じくコロナ禍におけるイベント運営についての発表だったため、得られるものが多かった。（神田）



図 2.4 ピンチをチャンスに！座談会2022

1. イベントのチラシ
2. 発表の様子（神田）

2.5 狩俣子供会（9月17日 沖縄県宮古島市 狩俣集落センター）

2022年9月17日、沖縄県宮古島市の狩俣集落センターにて行われたローカルヒーローショーについてまとめていく。今回行われたヒーローショーは普段披露している物語とは違い、学年が違うヒーローたちのコラボレーションとなった。また元々は敬老会で披露する予定であったヒーローショーはコロナウイルスが懸念され敬老会が中止となったがその代わりに子供会で披露した。

我々は石井先生が監督する宮古島市クバカ城跡の遺跡調査を行いつつ、宿泊していた宿の前でショーの練習をした。人口が少ない宮古島市といえど宿の前は想定以上に通行人が多く、着ぐるみを着ずに練習をしていたので少し恥ずかしかったのもいい思い出である。

狩俣の子どもたちからしたら我々は埼玉からやってきた知らないヒーロー。そんなところに人は集まるのだろうか、見ていただいた方々に満足してもらえるだろうか、そんな不安もあったが、蓋を開



図 2.5 狩俣子供会
 1. ステージショー後の写真撮影会、
 交流会の様子
 2. 宮古毎日新聞の掲載紙面

けてみるとたくさんのお子様や親御さん方が来場していた。その中に新聞の記者がおられ、ステージショー後にインタビューを受け、翌日の新聞記事になった(図 2.5-2)。

ステージショーは大盛況に終わり、無事幕を閉めた。そしてステージショー後の写真撮影会、交流会も盛況で子どもたちがとても興味津々でヒーローのもとに子どもたちが押しかけた。普段訪れない地でのステージショーだったが、ショー中の子どもたちの反応や前のめりになるほど集中して見ていてくれたこと、ショー後の盛り上がり度合いからすると、とても満足していただいた良いステージショーになったと言えるであろう。

上手くいった点として、やはり普段あまりヒーローが訪れない地でヒーローショーを行ったことが挙げられる。子どもたちからしたらヒーローはテレビの中の存在であるので実際に見られるとなると物珍しさに見に来るに違いない。

反対に苦労した点は、クバカ城跡の遺跡調査後に練習をしなくてはならないことであった。普段は講義の後に練習をしていたため、あまり肉体的に疲労していなかった。だが調査後は疲労が溜まった状態で練習が行われたため体が思うように動かなかった為、苦労した。

最後に、普段行くことのない地域で普段一緒にショーを行わない仲間たちと協力して作り上げたステージショーはとても良

い刺激となり、これからの活動により拍車がかかる経験ができた。こういった経験を学生のうちにできたことを活かし、今後活躍するための糧にしたい。(堀越)

2.6 レインボーフェスティバル (10月1日 埼玉県川島町)

令和4年10月1日に、川島町上伊草にある大型商業施設「カインズモール川島」の蔦屋書店川島インター店前駐車場において、「レインボーフェスティバル～世界が川島(ここ)に～」が、「埼玉東上地域大学教育プラットフォーム(TJUP)」と「城西大学経済学部勝浦ゼミナール」との共催で開催された。「地域や世代を超えた交流」をテーマで開催された今回の交流事業では、レインボー協議会を構成する6市町のご当地グルメに加えて、世界各地のグルメを堪能できた。

特設ステージ上では、我々ローカルヒーローショーの他、世界の踊りや音楽が披露され埼玉県のマスコットキャラクター達も登場するなど、会場は大きな賑わいを見せた。今回は沢山の地域の方々が会場に集まった為小さな子ども達からお年寄りの



図 2.6 レインボーフェスティバル
 1. ステージショーの様子
 2. ゲーム大会の様子

方達の前でステージショーをする事になり普段とは違った緊張の中で臨む事になった（図 2. 6 - 1）。ステージショー以外では、地元川島町のヒーロー『田園戦士かわじマン』と共に小さな子ども達と「叩いて被ってジャンケンポン」や「腕相撲」などのゲーム大会（図 2. 6 - 2）で楽しく交流した。

このイベントを通して良かったことは町内だけでなく、近隣市町との地域連携を通して発展していくこと、海外から移住者が増えている中、互いの文化を尊重し合いながら暮らせるまちづくりに我々石井ゼミが地域連携活動の一環として貢献できたことである。ヒーローショーイベントでは子供達と沢山触れ合う機会が沢山あったが、中々大人の方やお年寄りの方達と触れ合う事がなかった為、子供達を喜ばせるいつものイベントとは違った気持ちになり、自分自身の成長や自信に繋げた。（加藤）

2.7 ローカルヒーロー博覧会 3（10月30日 埼玉県坂戸市 城西大学坂戸キャンパス）

城西大学坂戸キャンパス17号館（経営学部棟）2階にて開催となった3回目のローカルヒーロー博覧会。我々石井ゼミのヒーローだけではなく、「暗黒魔戦士クロウリー」や「英雄収集ツインジャー」、「魂の演者ゲキダイヴァー」、「離島閃隊タネガシマン」といった総計50を超えるローカルヒーローが全国各地から城西大学坂戸キャンパスに集まって下さった。

本博覧会ではヒーローたちの集合写真（図 2. 7 - 2）や我々石井ゼミの城西大学ヒーローズと「離島閃隊タネガシマン」のコラボショー（図 2. 7 - 3）や本大学の漫画研究会が作成した「宇宙刑事キャビン」や株式会社L4様の「鎧勇騎月兎」などの作品を上映する上映会、RAPID PROGRESSの荒井豊氏、「離島閃隊タネガシマン」の企画者であり本大学のOBでもある野田直志氏たちに「ローカルヒーローの深淵を探る」をテーマにローカルヒーローの成り立ちについて何う講演会が同時に実施された。



図 2.7 ローカルヒーロー博覧会 3
 1. ポスター 2. 参加ヒーローたちの集合写真
 3. 「離島閃隊タネガシマン」と城西ヒーローズのコラボショー

受付や各催しの司会や運営は我々石井ゼミが主体となって行った。運営などはリハーサルや練習を重ね失敗しないよう緻密に準備を進めた。本番を迎えた当日この博覧会には沢山のお客様が来場し、素晴らしいスタートを迎えることができた。

私は上映会の運営の担当をした。内容としては主に上映会の司会進行、上映する作品の再生、照明の調整、音響の調整、各運営者の作品紹介の撮影を行った。

成功した点は開催前に設定した担当グループで開催前に入念にミーティングや練習を重ね、開催前日までには確実にスケジュールを把握し、当日は情報共有を怠らないようにしていた点にある。また、前日に担当メンバーで作業ダイヤを作成し、当日は作業ダイヤをもとに担当メンバーとの連携が上手くいき、トラブルもなく上映会を終えられた点である。

学生として成長できた点は我々石井ゼミ生との情報共有を大切にし、柔軟な行動ができるようになった点とこの博覧会を通じて沢山の方々と協力をし、この博覧会を成功させられたという点である。この博覧会で得たことを将来に生かし、様々なことに取り組む姿勢を忘れず大切にしていきたいと思う。(門)

2.8 華麗なるカレー博 (11月19日 埼玉県ふじみ野市 イオンタウンふじみ野)

埼玉県ふじみ野市にあるイオンタウンふじみ野にて行われた、“華麗なるカレー博”というイベントに私たち石井ゼミは昨年に引き続き2回目の参加をした。立体駐車場屋上の一部が利用された本イベントでは様々な団体が参加しており、特設ステージでの催し物や屋台が出展されていた。石井ゼミでは4年生の作品である『レベルJ』の第8話を、3年生の作品である『ディフロンターJ』の第2話を特設ステージで披露した。

このイベントでうまくいった点は、事前にチラシ配りをしたことであると考えられる。普段は坂戸市を中心に活動をしている為、私たち石井ゼミのヒーローを知らない現地の方々に向け、ショーが始まる前と終わった後にグリーティング(練り歩き)を行った。そして会場に疎らにいた子供たちを中心にチラシを配り、観覧してもらえるようにお声掛けを行った。結果、ショーが始まる時には大人も子供も関係なくたくさんの方が観客席を埋め尽くしてくれた。

ショーの中で特に盛り上がりを見せた所は殺陣のシーンであった。チラシを見ながらお気に入りのヒーローたちの名前を応援する子供たちの声会場を大いに盛り上げたのだと感じた。ショーが始まる前にヒーロー達の詳細が書かれたチラシを配ることで、子供たちが推しのヒーローを探すことができ、応援に力を入れることができた為盛り上がりを見せたのではないかと私は感じた。ショーが終わった後の写真撮影でも多くの人に撮っていただき、集合写真撮影後に個人で撮影をしに来てくれた方々の中にも、ヒーローの名前を覚えてくれていた方がおり、ショーとして成功を取めたのではないかと



1



2

図 2.8 華麗なるカレー博
1. 集合写真撮影の様子
2. ステージショーの様子

と言える。私たち一同もとても達成感の得られたイベントであったと思える。(図 2. 8 - 1)

反省すべき点はステージの上下をあまり活用できなかったことである。練習時にステージの上側を利用することを意識していなかった為、本番当日に急遽各々の登場するシーンや移動する時などを変更して行った(図 8 - 2)。緊急で変更したこともあり、上下のあるステージという特徴をあまり生かせずに終わらせてしまったという反省点があった。

最後に本イベント又ゼミ活動を通して、チームで一つの大きな作品を作り上げることの大変さやショーが終わった後の達成感を体験することができ、また自分達で考えて行動する自主性を身につけられたのではないかと考える。私自身は音響や殺陣で多くの失敗をして仲間達に多大な迷惑をかけてしまったが、失敗したことを引きずらずに次のショーに挑む強い心を持つことができた。(寺内)

2.9 坂戸イルミネーション点灯式(12月4日 坂戸駅北口サンロード商店会内タイムズ駐車場)

クリスマスの地元恒例イベントとなった坂戸イルミネーション点灯式に参加した我々4年生は、式典の前座として「レベルJ」第9話を披露した。最終回に向けて、物語が加速していく回であり、会場は大きな声援と共に盛り上がりを見せた。今作は物語が複雑であり、理解がしにくい点も多いが、それに伴いキャラクターの個性が際立っており、複数のキャラクターに一定数のファンが付くほどである。そのためか、大人も子供も大勢の方が足を運んで下さり、ステージショーとイルミネーションを観覧して下さい。ステージショー後の写真撮影では、子供だけではなく、幅広い年齢層の方々と写真を撮っていき、大盛り上がりイベントとなった。

上手くいった点は、練習時間が少ない中、ステージショーとして作り上げたものが結果的に大成功を収めたことにある。また、天候による影響でのアクシデントもありながらも、観覧に来てくれた多くの方々を楽しませることができ、その熱気のままイルミネーション点灯式の式典に移れたことは1つの成功点といえる。

反省点と苦勞した点は、暗い中でのステージショーであったこともあり、視界が悪く、普段はしないようなミスが全体的に多かったことである。また、練習不足から出るミスも多々あり、今後のための課題点が多くみられた。

学生として成長できた点は、石井ゼミナールの目標としている「地域振興」を肌で感じる事ができ、坂戸市のイベントをいち参加者として、1人の学生として、チームとして動くことができる達成感や楽しさを知ることができたことにある。今回のイベントだけではなく、石井ゼミナールで培っ

てきたものは今後の人生において忘れられない経験であり、自分自身の成長や自信に繋げることができたと思う。(諏訪)



図 2.9 坂戸イルミネーション点灯式
1. ステージショーの様子 2. 集合写真撮影の様子

2.10 坂戸児童センタークリスマス会（12月23日 坂戸児童センター）

2022年12月23日、坂戸児童センターのクリスマス会が行われた。石井ゼミは「タップダンスユニットNaNoHa」「きまぐれ手品師よだたかみ」とともにゲストとして当イベントに参加し、「レベルJ 第10話（最終回）」を披露した（図2.10-1、2）。児童センターだけあって、会場の大部分は子供たちで埋め尽くされており、ステージショーは元気な声援が飛び交う大盛況となった。また、最終回ということもあり、過去のレベルJのステージショーを見に来て下さった方もいたようだ。

しかし、そのステージショーでは数々のトラブルに見舞われることになった。具体的には、殺陣の最中に武器が破損したことや、殺陣の振り付けを間違えたことが挙げられる。小道具のチェック、振り付けの確認が甘かったことは大いに反省しなければならないが、本番ではこれらのトラブルにも落ち着いて対処し、アドリブで演技を続けることができた。これまでのヒーローショーの経験を活かして最終回でこのような対応ができたことに成長を実感した。ヒーローショーの後にはヒーローたちとの写真撮影会が行われた（図2.10-2）。多くの来場者と写真を撮影し、交流を深めることができた。

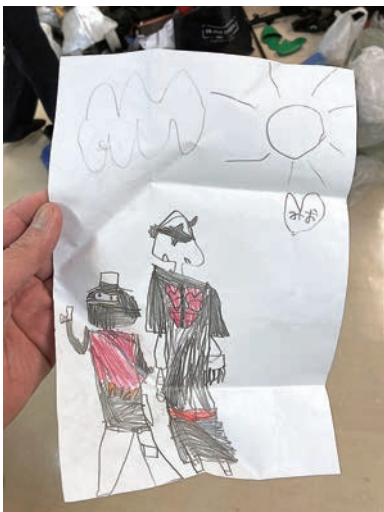
最後に、図のイラストは、観客の子供の1人が描いてくれたファンアートである（図2.10-3、4）。レベルJに携わってから約2年弱になるが、このようなファンアートを頂けたことは初めてである。地域貢献を目的として活動している石井ゼミにとって、これは大変喜ばしいことであると同時に、私たちの活動が子供たちに有意義な時間を与えられていることを形として感じたことで、より自信をつけることができた。とはいえ、有意義な時間を過ごすことができたのは私たち石井ゼミも同様であり、この坂戸児童センタークリスマス会で得た経験は何事にも代えがたいものである。（石塚）



1



2



3



4

図2.10 坂戸児童センタークリスマス会
1. ヒーローショー出演者の集合写真
2. ステージショーの様子
3、4. ファンから贈られたファンアート